3 MIN SUMMARY

3分で整理する

失語症の評価と訓練「話す」

KEY MESSAGE

「できた・できなかった」だけでなく、“どう間違えたか”“他の課題ではどうか”を見る。

失語症の評価では、得点だけでなく、誤り方・課題間の比較・個人内の得意不得意を見ることで、その人の言語機能をより詳しく捉えます。

POINT 01｜呼称は「誤り方」まで見る

呼称では、正答数だけでなく、どのような誤りが出たかに注目します。

・意味性錯語：やかん →「お湯」

・音韻性錯語：音の一部が変化する誤り

・形式性錯語：ほうき →「ほうじ」のように、音が近い実在語になる誤り

言葉が出てこない、説明して答える、前の反応を繰り返すなど、反応そのものが評価の情報になります。

POINT 02｜1つの課題だけで判断しない

課題同士を比較することで、その人の得意・不得意が見えてきます。

たとえば「呼称 ↔ 書称」は、どちらも絵を見るという入力が共通しています。「言えないけれど漢字なら書ける」場合、呼称の得点だけでは分からなかった力が見えてきます。

Z得点で失語症者の中での位置を見るだけでなく、同じ人の中での比較、さらに同じ単語ごとの比較も大切です。

POINT 03｜「入力」と「出力」を分けて考える

復唱で誤りが出たときは、聞いた音を正しく認識する入力側なのか、音として表出する出力側なのかを考えます。

必要に応じて、語音の弁別や仮名一文字の書き取りなどの掘り下げ課題を組み合わせます。

「できた」ことは、その処理が保たれていると考える材料になります。一方、「できない」だけでは、その処理だけが原因とは限りません。

POINT 04｜単語だけでなく「文になるとどうなる？」を見る

動作説明では、名詞と動詞のどちらが保たれているか、どのようなヒントが有効かを見ます。

漫画説明や文の復唱では、単語レベルではできていても、文の組み立て・情報の保持・文法的な処理などが加わることで難しさが現れることがあります。

単語から文へ課題を広げることで、より日常の発話に近い力を捉えます。

POINT 05｜漢字・仮名は「どちらができる？」だけではない

同じ単語でも、漢字では誤ったのに仮名では読めることがあります。

点数だけでなく、どんな誤り方をしたか、一文字ずつ読んでいるか、単語全体として読んでいるか、漢字と仮名のどちらが保たれているかまで観察します。

3分でおさらい｜「話す」の評価で大切な5つの視点

誤り方を見る　→　課題同士を比較する　→　入力と出力を分けて考える　→　単語から文へ広げて見る　→　保たれている力・処理を見つける

評価は、点数をつけて終わりではありません。その人の「できること」と「難しさ」を整理することが、次の評価や訓練を考える手がかりになります。

STudyLabo｜橋本幸成先生「失語症の評価と訓練―話す―」講義内容をもとに整理